

第66回 小中高校生の吃音のつどい(お料理教室)

3月22日(日)、小学生16人、中学生7人、高校生6人、兄弟姉妹8人、ご両親27人、スタッフ38人の計102名が参加。豊島区立池袋小学校ことばの教室及び家庭科室にて開催。シャーペン(中華風おやき)、酸辣湯(サンラーダンスープ)をお昼に、そして蒸しパンをデザートに。今回のお料理教室は、とても貴重な経験でした。ちょうどスタッフになって丸1年、僕にとっては重過ぎるリーダーという大役で迎えたイベントでした。学生生活を振り返ってもリーダーという重責は、初めての経験で能力的にとっても不安でした。しかも大学の授業が実習続きでレポートに追われる日々、時間的にも不安で一杯。ところが、反省点は沢山あるものの、他のスタッフ一人一人の多大なサポートがあり、どうにかリーダーを務めあげることができ、充実感を味わうことができました。特に金澤瞳さん(今回の中華料理の指導ご担当、スタッフ金沢誠さんのお母さん)にはお料理全般で大変お世話になり、感謝の気持ちで一杯です。試作会にも参加くださり、準備の段階では何度も分量などの質問をしたにも関わらず、いつもお答え下さいました。また、本番でも丁寧に教えて下さいました。感謝！(リーダー;遠藤優、吉良日希、金澤誠、宇都宮裕莉)

◆◆小学生グループ◆◆

「どもっちゃから勉強しても 意味がない気がするんだ…」

小4 Kくん「今、公文式で英語を勉強してるんだけど、結局発音したり読んだりする時に、どもっちゃから勉強しても意味がない気がするんだ……」

吉良日希^{はるき}(スタッフ)「僕も中高生の頃そう思いながら勉強してたよ。英語は好きだけど、どうせどもって上手く話せなかったら意味ないのかなって。でも、卒業旅行で英語圏のタイに行ってきたんだけど、どもろうが全然関係なかったよ。どこに行くのにも何を予約するのに値段交渉するのに英語を使わなきゃいけないから、自然としゃべらなきゃいけない。あと喋ってるとなんか楽しくて、どもろうがすごい喋りたくて仕方なかったよ。だから、実際外人と喋ってみると全然大丈夫だよ。ほんと考え方変わるよ」

小学生達の悩みに丁寧に耳を傾け、しっかり気持ちにより添い、返せる言葉を探る。最も大切な話し合いの時間。他スタッフの声も紹介します。

・「むしろちゃんと勉強しておけば、どもっちゃっても、ちゃんと伝わるよ。日本語で話してる時、どもっても最後まで言い切れば言いたいことはちゃんと伝わるよね。英語でも同じなんじゃないかな。たと

えば英語で話す時に「ありがとうって言いたい…けど英語で何て言うんだっけ？」って考えててずっと黙ってたかなかな伝えられない。けど、「こういう時はThanks って言おう」って分かっていたら、いざ話し出してどもったとしても、伝わるもんだよ。大事なのはどもらず言えるかどうかじゃなくて、伝えたいことを英語で何て言えばいいかを知ってるかどうかじゃないかな。だから、どもるかどもらないかに関係なく、勉強すれば何語でも、言いたいことを伝えられるようになるよ。

(嶋田聖子 スタッフ 東外大卒)」

・「勉強しつかりやっておくことは大切なこと。発表少し時間かかってただそれだけです。折れないでこつこつでいい。続けよう！(佐藤隆治)」

S.M さん(小5 S君のお母さん)

息子に声をかけていろいろお話していただいたようで、本人の中で何かが変わり始めているようです。新学期には担任の先生に、「これからは最後まで言い切りたいのでお願いします」と言いに行くそうです。息子の勇気と決心を応援します。

初参加であつたので息子はとても緊張していましたが、想像以上の大人数で、最初は圧倒されているようにも見えました。

午前のお料理では、小さい子が多かったので、

包丁を使う作業で活躍できたようです。作りながら、年上のお兄さんお姉さんに話かけてもらい、緊張も解けたと言っていました。

そして、午後の話し合いで子供は困り事を相談しました。息子は難発が強く、授業中に発表ができず困っています。また、高学年で委員会の委員長をしているので、全校の前で話す機会もあり、その時は副に代わってもらっています。

恐らく息子の難発は重く、言葉が出るまで時間がかかります。それでも、自分で話した方がいい、それが訓練になる…とアドバイスを貰い気持ちが前に向きました。私も同じような話を折々にしていました。しかし、親には投げ槍な態度をとることも多かったのですが、同じ吃音を持つ先輩の言葉は何の抵抗もなく受け入れられました。つどいのちからですね。今回参加して本当に良かったです。

★★ご両親グループ★★★

「どもり内親」を行いました。もう何とかして少しでも早くおさらばしたい…「どもりさん」でもあるでしょう。しかし、おさらばしよう、なおそう！改善しよう！あっちへ行っちゃえ！と思えば思うほど、その裏を常に突いてくる、付きまとわってくること…、既にお気付きかもしれません。そこで、「どもりさん」と、子供達のどもることを擬人化して、考えてみることで、新しい見方が生まれる。

A.Sさん(年長 K君のお母さん)

第二子である長男(5歳)が吃音です。導入部で、親同士が二人組になって、他者と自己紹介する場において、

「『どもりさん』に、世話になったことは何ですか」

「『どもりさん』に、して返したことは何ですか」

というテーマが設定されました。

そして、Sさん(小4K君のお母さん)が「この子がいるから、家族が一つになれる。自分も人として成長できた」という旨の話をされました。Sさんの話を聞いた瞬間、以前、母が私の長男のことを「この子は、福子だよ」と言っていたことを思い出しました。吃音は障害ではありませんが、吃音者がいることで、家族が一つにまとまれる！『どもりさん』は、素晴らしい子ですね。

我が家の場合、『どもりさん』が原因の一つで、

家族が一人欠けることになりました。しかし、私自身は、我が家の『どもりさん』と出会って、「このような世界」があることを知り、視野が広がりました。『どもりさん』に、とても感謝しています。

『どもりさん』が赤ちゃんで、まだ『どもりさん』だと知らなかった頃、『どもりさん』には食物アレルギーがありました。

どちらかと言うと、前向きに捉える性格の私は、「これも人生経験。食品表示なんて、これまで見なかったけれど、彼(どもりさん)と出会ったことにより、食品表示を見るようになり、大変勉強になった。私にアレルギーが無いので、彼(どもりさん)のアレルギーも、いつか治るだろうし」と、思っていました。ところが、食物アレルギーが治ったと思ったら、吃音の登場。これは、さすがの私も「人生経験」で片づけることができませんでした。

随分悩んだ後、つどいを教えてくださったOさん(高2K君のお母さん)からの励ましもあり、事実を受け入れることができました。そして、つどいで、皆さんと知り合うことができました。『どもりさん』は、私を成長させてくれました。

でも、私が『どもりさん』にして返したことは、何もありません。私は、親として当然のことしかしていません。言語聴覚士の指導を受けていますが、それは、親として当然のことです。病気になったら、病院に行ったり、予防接種を受けるようなことと同じレベルです。『どもりさん』と出会えたこと、神様に感謝しています。

R.Tさん(小2 Dくんのお母さん)

参加することができ親子共々、大変喜んでおります。ありがとうございました。

「どもりさんに世話になったこと」

・私を積極的に学校行事へ参加、PTA役員をさせてくれた。

心配性なので子供の様子を知りたい、友達関係が気になり、少しでも学校に関わりたと思ったから。吃音がなければ、私から積極的に学校へ関わることはなかった。

・穏やかに、楽しく過ごす時間を増やしたいと思わせてくれた。

生活の中で、子供が笑えば嬉しいし、子供が泣

けば悲しい、子供が怒ると落ちつかない…そんな自分の気持ちを沢山子供に素直に伝えようと思った。私も話すから、あなたも気持ちを聞かせてね！！という想いが強くなった。人一倍、子供の気持ちを知りたいと思わせてくれた。

「どもりさんにして返したこと」

特に思いつかず…でした。これから困った時、つまずいた時支えられる存在になりたい。失敗してもいつも味方だよ。と伝えたい。本人は、親を心配させたくない知られたくないという想いもあるようですが、その壁を払い退けたいものです。

「どもりさんに迷惑をかけたこと」

吃音の知識をもっと早く知るべきだった。園児の頃、いつか治るだろうと気にせず私の言いたい放題接してきた。知識があれば、本人の気持ちを第一に考えることができたのに。申し訳なさで一杯です。一年生の頃、吃音を知られるのが嫌で友達の輪に入らせず、一緒に家に帰らせてしまったことがあった。

N.Y さん(小6 Aさんのお母さん)

3月まで通っていたことばの教室の先生に、つどいを教えていただき、今回初めて参加しました。今まで「吃音児(娘)」と「親(私)」と「先生」という繋がりしか意識していませんでしたが、つどいで様々な年代の方と出会うことで「吃音児(娘)」と、「吃音をもつ多くの方々」という横の繋がりが無限に広がっていると感じました。普段は意識してませんが、社会には仲間がたくさんいるのですね。それを娘も感じてくれたのではないかなと思います。

スタッフの方をはじめ、娘より年長の皆さんの言葉は、色々な気付きや学びを与えてくださいました。皆さん、様々なことを経験し、考えたり悩んだりしながら、ここまで成長して来られたのだなあと思いながら、娘と自分のこれからの将来を想像したりもしました。

私は「吃音者」当人ではなく「親」の立場なので、個人的に一番印象に残っているのは、製薬会社にお勤めの社会人の女性のお話でした。その方は、ご両親と一緒に吃音に向き合って成長することができなかったのも、「お子さんと一緒に、つどいにいらっしゃる親御さんがうらやましい」というようなこ

とをおっしゃっていたように思います。

「親」の端くれとして、なんと言うか、胸が張り裂けそうなくらいせつなくなりました。一人で悩みと戦う、幼い頃の彼女の姿を想像し、その健気さに涙がでてきました。そして、きっと今も色々な悩みを抱えてらっしゃるであろう彼女に、どうか親御さんは気付いてあげて欲しいと勝手ながら願ってしまいました。親として大したことは何一つできない自分だけれど、娘のことを常に見守り、一緒に話したり悩んだりできる関係を大切にしていきたいと心から思いました。

想像以上に本格的で美味しいメニューにもびっくりしました！ごちそうさまでした。娘は「また、つどいに来たいなあ」と帰り道に言っておりました。

♣♣高校生グループ♣♣

K.M さん(高3)

私は今まで同学年の吃音の人と出会ったことがなくて…そのことを吃音外来の先生に相談したことがきっかけで今回の集いに参加することになりました。今回、同じ吃音をもつ仲間達と出会って…料理をして…話し合って……とても感動しました…。私の知らなかった世界に触れた感じがしたし、どもっていい環境ってこんなに安心するんだなあって思いました。そして今回初めてどもって話してる人を見て感動しました。

私は前から自分を落ち着かせるためにどもってもいいんだ……！って自分に言い聞かせていたけれど、どこかでどもりは恥ずかしいっていう気持ちが消えなくて…悩んでいました。

でも今回の集いでどもって自分の言いたいことを真剣に言おうとしている方の姿を目の当たりにしてカッコいいと思いました。集いに参加して本当に良かったです。最高です。

最後に…佐藤さんが話してくださったものさしの話、とても心に残りました。私は無意識に他人のものさしに合わせようとしてたのかもしれない。これから大学に行って、自分のものさしを見つけていけたらな、と思います。



根本 征幸(弘前大学 教育学部特別支援専攻4年)

最初どのように皆さんと接すればいいのか。また、今まで吃音をもつ方と接する機会がほとんど無かった私を受け入れてくれるのかと若干緊張していました。しかし、周りのスタッフの方からどんどん話しかけてくれたおかげでいつの間にか緊張は無くなっていました。「スタッフがとても明るい。一人一人が忙しそうにでも楽しそうに動き回っているな」そんな印象を最初に受けました。

ご両親グループではとても貴重なお話を聞かせていただきました。前半、「どもりさんに世話になったこと」「どもりさんにして返したこと」「どもりさんに迷惑をかけたこと」の3つの問いかけがありました。その時は自分自身の中で何だろうって考えてしまいましたが、今となり一つ言えることが、「どもりさんのおかげで「つどい」の皆さんと出会うことができた」ということです。そして学生としてこれからどもりさんに何らかのお返しがしたい。できるだけ迷惑にならないようにしたい。そのように思います。親御さんの話の中に、「辛いことやしんどいことがたくさんあった。けれど、どもりさんのおかげで自身が成長することもできたのかもしれない」という内容の発言にとっても感銘を受けました。悪いことばかりじゃないのかもしれないと思えた瞬間でした。後半のグループ討論の中で「言い替えをする自分は自分じゃない気がする」とおっしゃっていた方がいました。とても印象的でした。言い替えができれば良いといった単純なものではない。改めて当事者の気持ちを考えるきっかけになりました。

午後の高校生グループでは、スタッフを中心に高校生の参加者が自分自身のことを話してくれました。私が高校生の時にあれだけ自分自身のことを語れただろうか。自身がどんなことで悩み、どのように感じ、どう対応したのか。自分自身を客観的に分析し、かつ人に伝えることは以外にも難しいものです。もしかすると吃音があったことで自分自身と向き合う機会が多くあったのかも。そのように思います。スタッフのスピーチや経験談はとても説得力があつて高校生達がこれから生きていくためのヒントとなることがたくさんあるでしょう。

「つどい」は、参加する人達全員がとても生き生き

していました。さみしそうな顔をしている人はいませんでした。ここはみんなにとってのホームであり、初めて参加した人もすぐにホームになる場所であると感じました。私はスタッフでありながら、準備には携わることが難しいこともあります。こんな私を心よく受け入れてくださった皆様に感謝したいと思います。また参加します。ありがとうございました。

.....

私が「吃音」というものに初めて関わったのは、中学校3年生の時の担任の先生との出会いでした。授業中や朝の出欠を取る時などよくどもっていました。でもその先生はいつも元気でした。どもることを全く気にせず、楽しく授業をしてくれる先生でした。道德の授業の時間に、自分自身の吃音について話してくれました。

「先生は昔、中学生の時どもることをとてもコンプレックスに感じ、どもりさえなければいつも悩んでいました。そして高校に入学して、とてもどもる先生と出会いました。しかしその先生は全く気にせず、パワフルな性格な方でした。その先生を見ていると自然と励まされ、自分も先生のように自信をもって生きていこう。どもったっていいじゃないか。そんな風に思えるようになっていったのです」当時、15歳だった私にとって印象的なエピソードでした。

大学生になり、重松清さんの「きよしこ」という小説を読みました。きよしが出会い、別れ、友情、けんか、ほのかな恋の中でもどかしい思いを綴った物語です。私の担任の先生と重ね合わせて読みました。そのようなことがあつて、吃音を勉強してみようと思い、論文や文献を読みました。多くの指導法、または支援の仕方があることも知りました。

ある時、「中高校生の吃音のつどい」という存在を知りました。ホームページや活動報告、参加者の感想、体験談等読ませていただきました。心に残ったフレーズがたくさんありました。「楽しくもっていいんだなあ」「大きくなったらつどいのスタッフになる」「治る治らないの問題じゃない。食べる自分が私だから。治って欲しいけど治って欲しくない」私が思っている以上に深いことばなのかもしれません。スタッフの司会者がことばが出なくなった時、小学生の子供達が駆け付けて読んでくれるという場面もとても印象的です。この「つどい」は単に吃

音をもっている人達が集まっているだけじゃないように思います。参加者、スタッフ、保護者の方々、またはことばの教室の先生の全員が一丸となって「つどい」をつくっているように感じています。私の中学校の担任の先生がどうして元気に先生をやっているのか、その答えとまではいかないにしてもつながっている何かが「つどい」にはあるのかもしれない。

大学4年生として、卒業論文を書くにあたって、参加している方とお話ができればうれしいです。関わり、触れ合う中で私自身が勉強することがたくさんあると思います。どうぞよろしくお願いいたします。

◆◆兄弟姉妹グループ◆◆

北林 民子

小学生達が大きなお兄さんやお姉さんにまわりついて甘えています。お兄さん、お姉さん達の大学生活や就職が決まった旨の報告に保護者の方々は拍手！お子さんの将来への展望が開けたのではないのでしょうか。

開会式で「初めての参加です」と緊張気味に見えた高校生は、夕方の会では表情も姿勢も柔らかく「自分だけではないと分かりました」「また参加したい」との感想でした。

つどいにはいつも穏やかで居心地の良い空気が満ちていて、参加者それぞれにとってかけがえない場所であることが分かります。

「ことばの教室」では、ゆったりしたやりとりを通して「さまざまな形のコミュニケーションの楽しさ」を実感し、「話し方ではなく話す内容が肝心」だと気付いて、『表出への躊躇い』が多少なりとも軽減されることを願ってきました。自分だけの持ち味を大切にしたい夢中になれるものを見つけて欲しいとも。けれどもお役に立てなかった悔いばかりが残っています。

つどいに参加させて頂くと、皆さんが自分で自身を育てながら歩いていらしたことが分かり敬服の思い頻りです。迷いや悩みがあっても、ご自分の歩みを通して得られた自信は本物だと思います。

「兄弟姉妹グループ」のリーダーをなさった宇都宮裕莉さんは、幼い時からお気に入りだった絵本

『ねえ、どれがいい？』（ジョン・バーニガム作）を持参して読み聞かせをしてくれました。オチビ達が、てんでんばらばらに口にする気付きや感想などに丁寧に応じ、適切な相槌を打ちながら上手に読み進めていました。最後まで集中させていたのは大したものだと感心しました。そしていかにも喜びそうな便箋・封筒やシールを用意して楽しく作業させる工夫も。裕莉さんは保母さんに向いているのではないのでしょうか。

それぞれのグループで、充実した話し合いがなされたようです。経験や関心、悩みも年代によって多様だと思います。互いに仲間ならでの共感や、リーダー初め先輩方のアドバイスも心に残ったことでしょう。66回を数える「小中高校生の吃音のつどい」を支えてこられた方々に心からの敬意を表します。

宇都宮 裕莉(兄弟姉妹グループスタッフ、目黒区東根小卒)

Mさん(さいたま市高砂小ことばの教室教諭OG)はじめ、北林さん、吉田雅代さん(キッツオー中3暉君のお母さん)、Oさんがバックアップにしてくださり、計画の進行通り進めることが出来ました。

兄弟姉妹グループを希望した理由の1つとして、私自身高校生の弟がいるので、吃音の無い兄弟姉妹が私達(吃音者や、吃音)に対してどう感じているのかな？と思ったからです。今回の集いを通して、兄弟姉妹の温かみを感じました。特に、M.Sちゃん(小2、K君のお姉さん)と2人で話していて、私がどもった時に、Mちゃんが、「また、言いにくかったら助けるからね」と言ってくれたことが、とても嬉しく、印象に残りました。

後記

◆「どもりさんにしてかえたこと」 何もない…とおっしゃるお母さんお父さんいらっしゃいましたが、このつどいに、日曜日丸一日、家族で協力し合い、はるばる参加することそのものが、「してかえていること」に。

★「どもりさんに迷惑かけたこと」「どもりだから、(勉強)頑張れ！」と声掛けるのは違う。一生懸命勉強することは自己の成長の上で必須のこと。モチベーション上げるために何もどもることを持ち出さずと

も良い。そんなことしてしまうと、「どもりさん」から手痛いしっぺ返しが来る。

内観とは、父・母から、これまでお世話になった諸々を、一つ一つ丁寧に思い出していき、改めて感謝するところの作業。今回はその吃音バージョン。たまには、視点を変えてみることをお勧めします。煮詰まってしまう日常がもしあれば、こういう考え方もあるのだ…と。

♣自分の人生の主人公は自分自身。ならば、自分で納得いく「ものさし」を作ろう。「世間はどうだから、こうあらねば…」という自身の中の「世間のものさし」は捨てよう。実は世間は必ずしもそうは思っていない。

♣社会が、人口の1%を占めるどもる我々に期待していること。人は効率性のみで生きている訳ではない。効率ということばの枠外の価値にこそ気付きたい。効率のみが真だと、国民集団催眠にかかりがちな時代、真逆な生き方のできる我々にこそ、期待されていることかもしれません。

♥クラス替えで、担任にお子さんの吃音の説明に使えます。<http://zengenren.org/publish.html> 下段に、「吃音リーフレット(学童編)」。絵入り。小学生にも十分分かるもの。ダウンロード(印刷)無料。
(代表 佐藤隆治)